

川に親しむ

「第16回大西満杯争奪鮎友釣り大会」

優勝者

いとだ まさみ
糸田 正美 さん

わたべ友釣り研究会所属



糸田 正美さん

平成16年6月に、日野郡日南町で開催された「第16回大西杯鮎釣り大会」において、米子市在住の糸田さんが優勝されました。糸田さんの釣り歴は約30年。西伯町で生まれ、子どものころから川遊びをして川には親しんできましたが、鮎釣りを始めるためには17歳のころから。

鮎釣りの醍醐味について「鮎が釣れたときの『引き』の瞬間が楽しみなんです。釣りをするたびに、今度はもっともっとすごい引きを楽しみたい、と思いますね」と説明しています。また「川と鮎との駆け引きが面白いんですよ。例えばその日野川のコンディションや流れによって、針やしかけを変えなければならないんです。それから前日にほとんどの大会参加者が下見として鮎釣りをするんですが、そのときに釣られなかった鮎が力ギなんです。大会当日には、このときに隠れている鮎を探して釣るのが面白くて。それから友釣りのコツは、おとりの鮎を弱らせないでおくこと。これがポイントですね」と目を輝かせながら、鮎釣りの楽しさを語ってくれました。

糸田さんはこれまでも岸本町や西日本地区の大会で優勝した経験はあったが、当大会での優勝経験は今回が初めて。



大会風景

日野川で開催される様々な大会に参加してきて気になることが、二つあるそうです。

一つは大会参加者の高齢化。ここ数年の釣りブームで釣り人口は徐々に増えているそうですが、日野川でもルアーやフライなどの疑似餌を使った釣りを楽しむ若者が多く、鮎の友釣りの人口はまだまだ少ないとか。糸田さん自身が所属する『わたべ友釣り研究会』では鮎のシーズンに月一回、会員以外の人でも参加しての大会を行なっています。糸田さんはこれらでの交流を通じて、「若い人たちに、鮎釣りの楽しさを教えていきたい」と語っています。

そしてもう一つは、鮎の減少。「5～6年前から、昔と比べて信じられないくらい釣れなくなってきました。年々鮎が少なくなるのがとても気がかりです。また釣り上げた鮎も、以前と比べて小さく、大きな鮎がいなくなってきたみたいですね。」

この原因について糸田さんは、「ここ数年、鮎のシーズンになると日野川の川床にある石に、緑色の藻が生え出してきています。

このため鮎の餌となる苔が川床の石に付かなくなった。人間で言えば、一番の育ち盛りに当たる高校生みたいな時期に、栄養のある苔が食べられなくなるんですね。だから鮎が大きくなりません。鮎にとっては、とても育ちににくい環境になっています」と説明しています。さらに「日野川には天然のものだけでなく養殖された鮎も放流されているけれど、稚魚を放流しても冷水病など何らかの原因で大きくなれる鮎が少なくなってきているみたいですね」とも。

「普段は目に見えづらいのですが、毎年の鮎釣りを通じて日野川の水質が変わってきているように感じます」と語る糸田さん。「水質が変われば、当然のことながら生態系も変わります。生態系を変えないためにも、一人一人が川と水に対して思いやりを持ち、子どもたちが安心して川で遊び、魚釣りができるように、川と水を守っていけたらと思います」と、日野川への思いと願いを語っています。

